松戸市協働のまちづくり協議会（第２回）　議事概要

≪日　時≫　　令和６年５月１８日（土）１０時～１５時４５分
≪場　所≫　　松戸市役所　議会棟３階　第２会議室、特別委員会室
≪委　員≫　　犬塚　裕雅　会長、牧野　昌子　副会長、大成　哲雄　委員、
　　坂野　喜隆　委員、山口　恵理子　委員、羽村　太雅　委員、
　　星野　健一　委員、田中　勝規　委員
　　（欠席）小川　早苗　委員
≪傍聴者≫　　２名

１　開　会
※欠席者報告・委員定数確認、配布資料確認、傍聴許可確認

２　協働のまちづくり協議会　会長挨拶

３　議題
・令和５年度実施分 協働事業・市民活動助成事業 成果報告会（１４事業）

（1）
事業名：地域まるごとで孤育てを予防する連携システム事業（協働事業）
団体名：まつどでつながるプロジェクト運営協議会
担当課：子ども政策課
委　　員：養成講座の参加者の年代と、講座終了後参加者がグループ化するようなことはあったか教えて欲しい。
団　　体：60 代以降の方が中心である。グループ化については、1 期、2 期の方を交えて話し合いの場を 1 回設けた。当事者の声を聞いてその中で自分達ができることがあれば具体的な活動をしていきたいと声が上がっていた。自主的に活動していくサポートをしていければ良いと思う。
委　　員：子育ては見えないところに手を差し伸べるのが難しい。地域にくまなく行き届くと良いと思う。
委　　員：保育士免許や幼稚園免許を持ち働いている方や保育士をやっていないが子育てをしている 30 代の方なども上手く入っていけるとより面白くなっていくのではないか。
委　　員：円卓会議で課題を特定し、次にどういう政策をとっていくか検討するやり方について、子ども政策課にとってどのような良い点があると考えているか。
担 当 課：円卓会議に、地元の方々がたくさん参加してくださることで、市の方では分からないような悩みや課題を把握できると感じている。子ども部をメインとしたそれぞれの担当課も出席しているので、把握した課題を担当課に持ち帰ることができている。

委　　員：お互いに力を磨き上げて、いい形の松戸市のまちづくりに繋がっていくと願っている。生きたお金だと思う。

（２）

事業名：不登校の子どもたちの居場所づくり事業（スタート助成）

団体名：NPO 法人 EdFuture

委　　員：今後の事業展開の項目の中で、不登校家族へのケアとあり、とても重要な点かと思う。そこを解決しないと子どもが家から外に出て行かれない。学校に行くのが一番の目標なのか、一人一人の子どもの最善の幸せはどこに置くのか、団体の中できちんと検討して欲しい。

団　　体：子どもたちだけでなくその保護者の方が苦しんでいるということがこの１年間ですごく分かった。保護者の中には、学校に行って欲しいという方もいれば、生きているだけで十分だという方もいるが、皆さん悩み苦しんでいる。保護者の方が元気になったら、子どもも心を開いてくれるようになり、学校に行けるようになったという話も聞いており、保護者へのアプローチはすごく大事だと感じている。目的としては子どもの居場所づくりだったが、視野を広げて大人も対象に広げても良いのではないかと検討している。

委　　員：活動をどの様に周知しているか。

団　　体：サポートセンター等へチラシの配架、Facebook や X で周知、年に 3、4 回不登校の体験をした方を招き、保護者を交えたグループワークや協議をしている。

委　　員：どのくらいの年齢の子どもたちが根木内会館に来ているのか。

団　　体：小学生が多かった。中学生は不登校だけでなく、引きこもりで悩み家から出られないという方もいた。中学生は、公式の LINE や Facebook で連絡をもらうことはあったが、実際に根木内会館に来ているのは小学生の方が多い。

委　　員：学生のボランティアがこの活動に参加されたということだが、どういう経緯でボランティアになったのか。学生にとってどんな影響があったか。

団　　体：（まつど市民活動サポートセンター主催の）『Let’s 体験』という学生向けのボランティア体験講座の参加者で、運営としてやりたいという大学生の方がいらっしゃり、参加いただくこととなった。子どもたちのために何かしたいという思いが強く、参加して良かったとの感想があった。

（３）

事業名：料理教室を通じた父親の意識改革事業（協働事業）

団体名：MAISON IZARRA Oyatsu labo ＊ T naturel

メゾン イザラ おやつラボ ＊ テ ナチュレル

担当課：男女共同参画課

委　　員：協働事業実施の最後の年に参加費 1,000 円を取ることとなったが、目標を超えて参加者が増えて良かった。しかし、決算書を見ると材料費や経費が 432,897 円かかり、

55 組が参加しているので、1 組 7,870 円かかっている。次の計画は、考え方を検討して続けて欲しいと思うが、協働事業が終わった後、市では良いアイディアがあるか。

担 当 課：今回協働事業が終了し、今後現行のような形で、50 万円位の予算を組み事業を続けていくというのは、当課としては難しいと考えている。今後何かできることがあればご一緒させていただきたいとは考えている。

委　　員：例えば、団体が団体誌等を発行し収入を得る。団体誌が会員向けであれば、企業に広告を載せてもらい、広告費を得る。協賛してくださる企業などを市から紹介してもらい、広告を載せる方法もあるので、資金獲得を頑張っていただきたい。素晴らしい活動だと思うので今後とも続けて欲しい。

委　　員：「メゾンイザラおやつラボ」はどういった団体か。団体名の由来も教えて欲しい。

団　　体：食の大切さや、ものづくりの楽しさを伝えたい、食の力で世の中を変えていきたいと思い、活動している。イザラとはバスク語で星という意味であり、ナチュラルな素材をつかっているということでナチュレル、おやつラボは一言でおやつおかしを作っていると分かるようにこの名前にした。

委　　員：これまで成果を上げてきたものを残すために、今後どうしていくか、どうやってノウハウを生かしていくか。市内の他の男女共同参画関係の団体と連携し、ワークショップの形態を進化させながら事業を続けてほしい。

委　　員：父親が子育てに参加することが、家の中が上手くいくことに繋がっていくと思う。当事業は料理というツールの技術習得よりも、家族の意識の醸成に対して有効的な手段だと考える。

（4）

事業名：日本語を母国語としない子どものための学習支援事業（協働事業）

団体名：認定ＮＰＯ法人外国人の子どものための勉強会

担当課：国際推進課

委　　員：会場の確保が大変難しいので、担当課には協力や紹介いただければと思う。人材について、次世代の育成が必要となってくると思う。素晴らしい活動なので是非、今後も頑張っていただきたい。

委　　員：今年度も協働事業として実施されることになっているが、担当課にお伺いしたい。これから外国人の子どもはどんどん増えるので、1 団体で今後も全部やっていくのは限界があると思っている。その中で市としては次の展開としてどうするのか、他にもそのような団体があるのか、どの様に協働事業を生かすのか、今年度は少し考えて欲しいと思っている。

担 当 課：ますますこれからも外国人は増えていく。市全体として、子どもだけでなく全ての外国人の方への支援について連携強化していかなければならないと考えている。

多文化共生というテーマを持っている課として、このような活動をしている団体に感謝している。どんな団体が他にもあるのか把握しきれていないが、もしほかにも

あれば連携していきたいと思っている。

委　　員：国際推進課が主担当だが、教育委員会等と連携はしているのか。

担 当 課：なかなか連携できていない現状がある。ただ、先ほども申し上げた通り多文化共生が大きな課題であり、検討しなければならない。今後、教育委員会と連携しないと進められないという部分も出てくるので、当課としても検討していきたい。

委　　員：外国の子どもたちを真ん中において、大人たちが何をするのかもう一度考える必要がある。今回は上手く各主体と連携できなかったとのことだが、他の子育て支援関係の主体とも連携出来ると思う。

団　　体：子ども食堂等他の団体との連携を始めることができている。

（5）

事業名：冒険山開放に伴う見守り事業（ステップアップ助成）

団体名：冒険山開放委員会

委　　員：冒険山の開放日になかなか人が集まらないが、イベントには大勢の子どもが来る。その時の協力団体としてガールスカウト、グランドゴルフ、ソフトボールチーム等地域の人たちに声を掛けて協力いただいているというところは地域にとっても良い広がりであり、良い取り組みだと思った。焼き芋、ザリガニ釣り等のイベントを通して子どもたちに自然の中で体を動かす等伝えていければ良いと思った。

委　　員：教育委員会等との連携はしているか。

団　　体：市にイベントの後援申請をしているが、それ以外に連携というのはあまりない。子ども会が減り、子どもへの投資があまりないように感じる。

委　　員：子ども会がなくなってきたというのは社会的な要因もあり、子どもが少ないという少子化の問題もあるので、何ともしがたいが、団体としては、市との連携や後退したときに活動をどうやって続けていくかというところが一番重要なことかと思う。

委　　員：今回で助成事業の方は終了ということだが、今後の取り組みを聞かせて欲しい。

団　　体：小金北小の見守り活動は見直しをする。これまでやった 3 大イベントは継続するが、20 万円弱のお金が掛かるので町会自治会から寄付金を少しでもいただけないか、準備を進めているところ。予算の方は何とかなるのではないかと思っているので、大きな変更はせず活動が維持できるのではないかと今のところは思っている。

委　　員：オンラインセミナーになかなか人が集まらなかった理由と、今後の取り組みを教えてほしい。

団　　体：オンラインセミナーは今回が通算 3 回目の開催だった。過去 2 回は昼の時間帯に実施し、5 名前後しか集まらなかったため、今回 20 時から実施したが、16 名しか集まらなかった。近隣の方たちの子育てに忙しい世代の方たちに集まってもらいたかったが、そういう方は 2 名程で、関係者や教育に関心のある方が全国的に参加していた。アプローチの仕方など反省すべき点はいろいろある。

（６）

事業名：町会・自治会の活動をＰＲして親しみをもってもらおう事業（協働事業）

団体名：できる街プロジェクト

担当課：市民自治課

委　　員：このアニメは、どういう形で見られるのか。

団　　体：インターネット上で漫画もアニメも見ることができる。
『松戸市、市民自治課、漫画、アニメ』『町会、自治会、松戸市』等で検索してもらうと出てくる。

委　　員：広報媒体として、普及啓発パンフレット、市の広報、PR 漫画、アニメと 4 種類あるが、どのように使い分けているのか。具体的な手法があれば教えて欲しい。

担 当 課：アニメに関しては、町会役員の研修会で使用してはどうかと声が上がっている。町会・自治会に加入いただくために使うのはもちろん、現在町会・自治会に携わっていない方たちに活動を知ってもらうために使うことができると考えている。漫画・アニメを見てもらうための戦略としては、配布するポスターやチラシに必ず QR コードを掲載することで、見ていただけるようにしていきたい。

委　　員：アニメの視聴者のターゲットを絞り、転入者の人たちに見ていただくのが良いと思う。せっかく 10 話まで出来ているので、あとはとにかく多くの人に見ていただくところに力を注いで欲しいと思う。

委　　員：このコンテンツを使って町会自治会の加入率はどれくらい上がったか。もし変わっていなかったとしても、近隣を見ると町会・自治会加入率が下がっているにもかかわらず、現状を保っているというのは実質的には増えている、成功しているという見方もある。もし、分かれば教えてほしい。事業自体はとても良いと思うので、協働事業終了後も続けて欲しいと思う。

団　　体：12 回最終話の構想はできたので、是非楽しみにしていただきたい。町会・自治会から他の団体に寄付金が出せるようにもっと加入率が上がると良い。

担 当 課：加入率の件について、全国的に下がっており、協働事業を始めてからも松戸市の加入率は少しずつ下がってきてしまっている。市の現状として、人口が増えており、外国人も増加傾向にあるので、外国人に向けた対応を検討しながら加入率を上げていきたい。

（７）

事業名：松戸市内廃棄食糧再利用事業（スタート助成）

団体名：おからを食べよう会

委　　員：団体は、お豆腐屋さんの事業者の集まりなのか。市内の食料品店の方々は何団体いて、どんな方たちなのか教えて欲しい。

団　　体：所属している 6 名は、飲食店を営んでいるというわけではない。今回扱わせていただいた方々は、市内のお豆腐屋さんの方にこちらから声を掛けて、こういった取り組みをするにあたって参加して欲しい等依頼した。

委　　員：事業者は何店舗なのか。

団　　体：3 店舗である。

委　　員：講習会に参加した方たちの属性、年代は。

団　　体：メインの参加者層は親子で、11 組が参加してくれた。次に多かったのが 30 代から 50 代の主婦層だった。

委　　員：スタート事業 2 年目に今回応募されなかった理由は。

団　　体：今回、数字として目に見える成果というのが感じられなかった。方向を変えていきたい。

委　　員：実食のところで出てくる料理は考案したのか。

団　　体：料理は会長と参加してくださった講師の方と、少しでも美味しく興味を持ってもらう料理をということで、考案した。万人受けするメニューというよりも一部の人には喜んで楽しんでもらえるものにした。

委　　員：実食された方たちの反応はどうだったか。

団　　体：すごく喜んでいただいた。おからのイメージというのはあまり良くない方もいらっしゃるが美味しいと言っていただけたのは喜ばしい事だった。

委　　員：食品を扱っているところから廃棄物として出たものを使ってもらおうということだが、料理の行先として、子ども食堂等普段苦労しながら食品の調達をしているところから話を聞き、お店側も「廃棄するのであげます」という話になれば、今の問題とセットで展開してもいいかと思った。食べてもらって消費してもらうのが大切なので、市内にも多くある子ども食堂とも話をしながら、食品を多く扱っているところにもつなげていってレシピをセットで展開していくのはどうか。そうするともうちょっと広がっていくのでは。

団　　体：子ども食堂をやられている方の話を聞く機会があるが、お子さんが興味を持ってくれたりお子さんとの対話が生まれたり、もっと広げられるのではないかと思う。

委　　員：目標が、廃棄されやすい松戸市内の食品の認知拡大とのことだが、SNS は活用しているか。

団　　体：SNS は主に写真で見ていただける Instagram を活用している。どこも苦労していることだが、認知の拡大をしても、受動的に見ていただけるものは少ないと考えている。

（8）

事業名：みんなで育て、みんなでつくる　沿道での食べられる景観事業（ステップアップ助成）

団体名：エディブルウェイプロジェクトチーム

委　　員：千葉大学園芸学部と発行していた冊子がなくなった話を聞いたのだが、大学の皆さんとの活動内容や交流について教えていただければ、大学と団体との協働とか、市との協働というのがより見やすくなるのでお伺いしたい。

団　　体：私自身、千葉大学で大学院の研究室のプロジェクトとしてこれを立ち上げた。研究室がなくなった後、参加者として関わってくださっていた方、運営の中心メンバー、

園芸学部の学生、コミュニティづくり等に関心ある方が引き継いで関わってくれている。市内エディブルに関わる地域活動をしている団体と一緒に定期的に『瓦版』という冊子を出していたが、コロナ期間以降団体間のコミュニケーションが LINE だけでしかつながらないような形態になってしまい、今年度継続が難しくなってしまった経緯がある。それぞれの団体の地域活動は継続している。

委　　員：育てていない方にも興味を持って欲しいと思う。育てている場所を、地域の方、近所の方が知ることはできるのか。

団　　体：今年度から、みどりと花の課と協働事業を開始し、これまで担当課が管理していた歩道においてある大きなプランターで食べられる景観づくりをスタートできることになり、ようやく地域のどんな方でも参加できるような取り組みを開始した。6 月に植え替えをするが、子ども会や、地域包括やこれまで関心のあった方みんなで育ててみんなで収穫を楽しみましょうという活動に繋がれたと思う。

委　　員：リレー栽培はみなさんにとっていい形になったのか。

団　　体：これまで、1 回 1 回ひっくり返して根っこのごみを取って天日干しして、たい肥を混ぜて戻すという作業をしていたが、やはり高齢の方は作業ができず学生が手伝いに行ったりしていた。マンパワーがなかなか足りないので、リレー栽培は、活動にとって軽やかに継続していくための要かと思う。

委　　員：このように交流が積み重なってきているということで、食べられるものだから、一緒に料理して一緒に食べるという時期にそろそろ来ているのではと思うが、どうか。

団　　体：ちょうど先日、収穫時期に収穫物を持ち寄って「その時にあるものをみんなで楽しみましょう」ということをみんなで話して決めたところ。一緒に食べる活動はコロナ前にはもともとやっていたが、今年度からできるかなと考えている。

（9）

事業名：「おひとりさま安心生活相談」事業（スタート助成）

団体名：特定非営利活動法人　おひとりさま安心コンシェルジュ

委　　員：講演会は何人ぐらいまで受け入れられる状況だったのか。

団　　体：市民劇場を使ったので実際 100～150 人ぐらい来ていただけると思うが、まず皆さんに市民劇場でできる団体だということを周知できればと思った。

委　　員：対象とされる方々は、移動の難しい方も多いと思うので、可能であれば、いろいろな地域で、もう少しコンパクトに開催するとより多くの方に届くのかと思う。

団　　体：今後、シニアクラブ等とも一緒にやっていきたいと考えている。

委　　員：収支決算書の中で、当初助成金としては 10 万円申請されているが、1 万 5 千円で済んでいる。これは、何が計画と大きく違ったのか。決算額を見ると、広報のチラシ作成額がずいぶん少ない。団体として皆さんにこんな活動をしている、こんな相談が受けられる、ということを広く周知するという意味では、この広報のところは大事だと思う。どの様な計画でこの決算書になったのか。

団　　体：広報のところで多く使用している切手代について、1 回多いときで 140 件程郵送し

た。結局、地域包括センター以外の福祉団体、例えば介護施設などに送ったが反応が得られなかった。現状は、現場の方から直接聞くより、地域包括センターを経由する相談が多い状況。封入作業をなかなか全員集まってやるのは難しく、チラシ作成が削減となった。予算のほとんどが、広報、切手代だったので経費が減った結果となった。今後どのような広報の仕方をしていくのか、どのように予算を使っていくのか、ご指摘のとおり考えていかなければならない。

委　　員：相談者の方々が、団体の活動範囲ではない部分まで相談されている難しさがあるのではないか。

団　　体：成年後見は無料でやってもらえるのではないかと言われることがあるが、報酬をいただいているものである。制度の相談先が国なのか市なのか、市民後見人と専門家の職務領域がごっちゃになっていたり、なぜやってくれないのだ、と相談者と押し問答になったりする。法律と介護と成年後見のことを説明できる機会があったら良いと思う。

（１０）

事業名：四世代のきずなで、豊かな生活環境を実現する事業（スタート助成）

団体名：小金原みんなでわくわくする会

委　　員：今回このプロジェクトは四世代の交流を目指すということだが、それぞれの活動の中で、この四世代がどれぐらいの割合で参加しているか。

団　　体：世代別の統計というのは取っていない。20 代～30 代前半が 1 人から 2 人、40～50 代が 3、4 人、残りは 60 代以上というような構成で合計が 11 人ぐらいといった構成である。

委　　員：こういった取り組みは今後も同じコンセプトで続けていくと思うが 20 代～30 代ぐらいの若い世代がもっと参加してくれるためにどんな風にしたら良いか何かアイディアがあるか。

団　　体：四世代の交流会には 62 人が参加しており、その中に小学生もいた。18 歳以上の青年は少なかったが、全世代に行えたと思っている。それ以外では若い人達が興味を引くものとして、防災センターの見学会等、そういうところで小学生、中学生中心に興味を持ってもらえた。コンポストは花を好きな方や専門の方がいるので、そういう方に入っていただきながら行った。

委　　員：伺いたいことが 2 点ある。1 点目は、昔、防災を教えてくださる方がいらっしゃったが、そちらの方との関係、連携といった蓄積もあった団体だと思う。その方々のノウハウ等、生かされていることがあれば教えていただきたい。2 点目は、その活動は町会から発生したと伺っているが、町内会との連携、地元の人との関わりを教えてほしい。

団　　体：小金原地区としては教えて下さる方と一緒になってやっているが、地域での連携の基本が必要ということで、その準備を今までやってきた。四世代の交流会も一回やってみてということで、今期からは行動に移して参加者数を増やしてやっていく。

町会との関わりはそういった運動をやろうというのは三丁目町会のメンバーから湧き上がってきたものなので、これからさらに広げて地区でやっていく。地区での活動はすでにマスコミ取り上げられているが、そういったこともこれから出来るのでないかと考えている。

委　　員：町会活動は昔からある活動だと思うが、そこに新しいSDGsだとか、SWOT分析だとかそんな風な手法を取り込んでいるということは新しいなと期待している。是非、若い世代にも次の担い手ができたらいいと期待する。

委　　員：みなさんの取り組みが、地域の中でいろんな話があるが、SWOT分析を使って交通整理し、それをSDGsの考え方で紐付けし、自分たちは何をどうすればいいのかということを特定し、見える化している。あとは、これを具体的に1個1個きちっとものにしていくというところで、いろんな人たちを巻き込んでやっていくといいなと思い聞いていた。活動にあたり力を外から借りてくるというやり方もあるかなと思う。

（１１）

事業名：［生きづらさ・ひきこもり］一人ひとりに合わせてつながりが広がる事業
（ステップアップ助成）

団体名：生きづらわーほりプロジェクト

委　　員：1回には3人と参加者は少ないかもしれないが、これだけの回数を重ねていくということがやっぱり大事かと思う。一方、そこに行くことがもう大変なことなので、引きこもっている人にそこにつながる糸口として広報がカギになるかと思っている。もう少し強化できればいいのかなと思う。心配を抱えている人がアクセスしやすいような行事やイベントなどの媒体でどうにかできないかなと思った。

団　　体：おっしゃる通りで、そこが一番難しいところ。昨年度もコンポストというツールを使って何かできないかという考えまではいったがなかなか難しかった。福祉の相談窓口と連携しながら「相談会をします」といった情報を伝えてはいるが、なかなかその先、当事者のところまでは難しい。

委　　員：心配しているのは、2つ。1点目はまず人材。松戸でも集めてもなかなか来ないと聞いた。どのような努力をされているのか。2点目としては、日本はこういうものに対して支援というものがあまりない。自治体の方も現在財政難の問題もあって、こういった活動を支援することがなかなかできないので、市民活動に対する支援は素晴らしいと思うが、多分、それでも足りないと思うので、どのように活動持続可能にするために頑張っているのか。

団　　体：1点目は、法人向けには情報を伝えていたが、一般の人向けに情報を伝えるにはどうしたらいいのか、分からず、結果に至らなかった。団体の情報を聞いたり、市民活動サポートセンターに相談して、ボランティア体験の講座に申し込むなどした。2点目は法人化ということを考えている。ここでしっかりと収益事業など、お金の面も安定していける体制を作りたい。助成金だけでない活動を出来るようにしてい

きたい。

委　　員：いろいろ試行錯誤を重ね、多分いろいろしながらこういった形になったのだと思う。一つ道筋が見つかってきたという印象を受けた。今後の展望で自分たちの活動の仕方というものを、これを土台にしながら息長く続けていけるようになること、当事者向けの情報発信だけでなく、自分たちを応援してもらえるような情報発信をしっかりやって、市民活動サポートセンターも使って次のステージに行っていただきたいと期待している。

（１２）

事業名：ときわだいらオープンアトリエ事業（ステップアップ助成）

団体名：特定非営利活動法人　ディープデモクラシー・センター

委　　員：心や生活にゆとりのある人は参加したいと思うのではないかという気がするが、孤立していたり、生活にゆとりのない人にとっては距離があるのかなと思う。このサイクルが回りだすことによって、孤立していたり経済的に余裕のない人たちがどのように入ってこられるのか、それをどのようにサポートできるのか、教えて欲しい。

団　　体：私たちはこの活動以外に、生活困窮者の支援や、ホームレスの支援なども日常的にしている。例えば、既にこの中に１人は孤立していた方が、コミュニティの一員として今支える側に回ってくれている。

委　　員：ドラムサークルについて、人数は少ないかもしれないが何回も開催しているというところが、定着していくのかな、と期待している。また、ドラムサークルは音の問題が大変かと思うがどうか。

団　　体：ドラムサークルを始めて３年目だが、最初は苦情もあった。会場の隣のビルにブックカフェがあり、一人で静かに本を読むという方が多かったので、常盤平のビルでやるときはブックカフェがお休みである火曜日・水曜日に実施し、苦情は来ていない。

委　　員：資金について、助成金が終了した場合にこういった活動をどの様に持続可能にしていくのか。今までは支援される側の方が支援者になったという素晴らしい話をお聞きした。そういうことも含めて人材育成等も考えているのか。

団　　体：助成事業とは別になるが、以前支援される側だった方も含めたチームで、能登半島地震の災害支援で珠洲市に行った。お金に関しては物の寄付はだいぶ増えたが、お金の寄付はなかなかないので、いろいろなことを組み合わせつつ支援をいただいて、団体がやっていることに価値を見出していただくしかないと思う。例えば仮放免の方とか支援の道筋がなくてうちに関わっている方がいて、こういう大変な方たちがいるというのを伝えていくことが団体のミッションだと思っているので、伝えていくことで協力者を増やすことができるのではないかと思っている。

委　　員：昨年度で助成金は終了したが、団体として切り口を変えて、新しい掴みでできると思う。いずれにしても、常盤平発信でこういった取り組みを多くの人が共感しやすい組みだと思う。巻き込まれたい人たちも多くいると思うので、全国に響かせてい

けるように期待している。

（１３）

事業名：「まつどの介護」プロモーション事業（協働事業）

団体名：特定非営利活動法人　SmileResource

担当課：介護保険課

委　　員：動画の再生回数多いが、その理由はどういったところにあると思うか。

団　　体：最初の伸びた動画が、ペットを飼えるグループホームだった。介護とグループホームや、介護職員、ペットでどこかにつながり、大勢の方が見てくださったのかもしれない。

委　　員：必要な方たちに届くという事が出来ているのかなと思う。再生回数が多いことや、見ている人の分布というものも知れたら面白いかもしれないと思う。

委　　員：この動画制作の目的、元々作った時に考えていた主なターゲット層というのはどういうところを想定していたのか。

団　　体：ターゲットとしては、介護を必要とされる方はもちろんだが、介護の仕事をしてみようと思っている方、学生の方、YouTube などで日本の介護を海外の方も見るかもしれないのでそういった方をイメージしていた。

委　　員：『まつどの介護』というテーマで行くと、全国の他の自治体と比べて進んでいるとか、ここが魅力だというところが動画の中で打ち出されているのであれば、シティプロモーションに持っていくといったこともあり得るのかと思う。介護部分だけではないところも巻き込めると、より効果が上がっていくのではないかと思う。

委　　員：この 3 年間の間に離職問題に効果があったか、3 年間を振り返っての感想を担当者の意見も踏まえて聞かせてほしい。

団　　体：離職問題は、私たちの動画だけでは何とも言えないが、介護職員の表彰動画を作成して、見た方からは「感動した。」という声もあり、それを見て、もうちょっと頑張ろうと思った方もいたと思う。感想は、高校生をまとめて説明し時間のない中で撮影して、大変だった。ただ、今の若い子たちがどう考えているかがよく分かった。取材に行ったときにどこに苦しんでいるのか管理者の方からも聞けた。介護事業をなくさず安定して供給できるサービスを提供するためにはどのようなサポートが必要なのかというところが少し感じることができたかなという３年間だった。

担 当 課：高校の生徒さんと一緒に作り上げるということは当初予定をしていたわけではなかったが、団体の努力もあり実現したというところが制作側としても意味のあったことだと思う。あとは、表彰や学校紹介の動画など、多方面の動画を作れたということが、いろんな方にとって有意義なことだったと思っている。

（１４）

事業名：まつど de SDGｓ の輪を広げようプロジェクト事業（協働事業）

団体名：まつど地域活躍塾つながりの会

担当課：政策推進課　SDGs 推進担当室

委　　員：事例集の作成の取り纏めも WEB 掲載がまだということだが、それは今年度やっていくということか。

団　　体：事例集は昨年度の目標にはなってしまうが 20 事例と増やして、今年度 WEB 掲載を速やかにやりたい。

委　　員：収支決算書の中で、最初の計画の中では事業全体としても 37 万 8000 円あった。負担金としては、約 32 万円だったが、決算を見てみると、1/4 の予算消化のようになっている。これは、事業全体でいうと何ができていないのか。予算が少なくて良かったのか。計画そのものがきちんと立てられていなかったのか。

団　　体：まず使わなかったところとして、事例集の WEB 掲載に加え印刷、配布するという印刷経費。SDGs の教材も市民活動助成の時から引き継いで活動内容としては計画書に入れていたが中身はまだ作っていない状態。この印刷経費が大きな予算としてあるので、ここを使わなかったというところが大きい。

委　　員：結局、活動する時間がなかったということなので、きちっとしたスケジュール感を持って計画して欲しい。

団　　体：計画を立てるときにしっかりと精査をすべきだった。

委　　員：見積もりと計画を付け誤っている印象。欲張りすぎだったのではないか。そのあたりを担当課はどう思うか。

担 当 課：年度当初に計画を確認した際には、内容がかなり盛り込まれていると感じた。協働団体も本業を持つ方がいらっしゃるので、なかなか時間が取れず、実施したい内容が中途半端になってしまうのではないかということもあった。今回、実施できなかった事業に対する責任は我々にもあるので、令和６年度はそういったことがないようにしっかりと事業を展開できればと思う。

委　　員：期待しているので全体整理をして欲しい。いい形で生きたお金にしてもらえることを期待している。

委　　員：SDGs は 2030 年という区切りがあり、そこまでに何とかしましょうという問題意識から設定されているものだと思う。そのあたりも踏まえたプロジェクト設計になっているのか。何か構想や 1 年間これまでやってこられた手ごたえがあれば教えてほしい。

団　　体：SDGs を意識した取り組みを、ネットワークでできるか、ということを会としては大きなところとしている。2030 年までに達成できない目標もあるかと思うが、パートナーシップというところを重視してやっているので、17 番目の目標の達成、市民団体の巻き込み等に焦点を当ててやっているところではある。

担 当 課：一人では達成できない目標でも、みんななら達成できる。団体はいろんなネットワークを持っているので、そういったところをコミュニティハブとして、市民の方々

にもSDGsの推進をしていければ良いと思う。

会　　長：総評

５　閉会

（事務連絡）